

「私の願い～九州北部豪雨を通じて～」

熊本県 球磨郡湯前町立湯前中学校 3年 ^{いまだ} ^{ももか} 今田 桃花

2012年7月12日。この日が何の日かは、大抵の人がわかるだろう。九州北部豪雨が起こった日だ。豪雨により、九州北部では土砂災害などの災害にみまわれ、多くの死者や負傷者を出した。私も大雨が降ると、あの日のことを思い出してしまう。

2012年7月12日、当時小学校6年生だった私。ちょうどその日は、当時中学校3年生だった姉の高校説明会があり、いつも家にいる母は、その日、家にいなかった。私が学校から帰ってきて、一人で家にいると母が帰ってきた。その時、

「神瀬の家、もうだめげな。」

突然母から突きつけられた言葉。突然すぎてすぐに理解できない。でも、何か悪いことが起きたということはわかった。頭が真っ白になる。そんな私は、

「何が。」

と聞き返すことしかできなかった。そこで母が話してくれて、ようやく理解することができた。神瀬にある祖父の家は、土砂崩れに遭い、その時、その家にいた叔父一人と祖父は近所の人之家に避難しているということだった。もう一人の叔父は仕事に行っており、飼っていた文鳥を避難させていた部屋だけが被害を受けなかったため、命を落とす人がいなかったこと、祖母の遺影も助かったことなどを聞き本当に安心したが、私の心の中には、あの時と同じような大雨が降っていた。命も遺影も助かったことは本当によかったと思う。しかし、神瀬の家は、小学校5年生の時に亡くなった大好きな祖母との大切な思い出の家だった。一緒に遊んで、一緒にごはんを作って、たくさんのことを教えてもらった祖母との大切な思い出が詰まった家。祖母がいなくてもその家にいると祖母といるときと同じくらい落ち着ける家。小さい頃は、帰りたくなくて泣いて何度迷惑かけただろうか。それほど大好きな家をなくした悲しみはとて大きく、今もまだ残っている。災害によって失うものの大きさを知った。

何日か経ち、神瀬の家を見に行ったら。そこで見た光景は想像以上にひどかった。玄関のドアは倒れ、畳は外に流れ出ていた。叔父の車は土砂に埋もれ、家の中には、土砂が積もっていて、正直言って、あの大好きな家だとは思えなかった。ここは、家ではなく、土砂を積んである倉庫か何かかなあと思うほどだった。そこで、土砂災害の恐ろしさを実感した。私は、そのような災害は、自分には関係のない話だと思っていた。しかし、いつ自分の身に起こるかかわからないのが自然災害だと気づかされた。

さらに、祖父が受けたインタビューの記事を読み考えたことがある。その記事の見出しには「危険信号を見逃してはならない」と書いてあり、祖父が答えた内容の中には、「7月12日の朝は、夜勤帰りの長男が風呂に入っていたところ、水道の水が濁っていることで異変に気づきました。」という文がある。危険信号を身の周りのもので例えてみると赤信号だろう。赤信号に気づかず見逃してしまうと事故に遭う可能性が高くなる。最悪の場合、命を落とすこともあるだろう。もし、赤信号に気づいて見逃していなければ、事故に遭ったり命を落としたりせずに済むだろう。このように考えると、そのときに祖父たちに出された危険信号は「水道の水が濁っていたこと」であり、それを見逃さなかったからこそ、祖父たちがいたところに土砂が流れ込んでくる前に避難でき、命を落とさずに済んだのではないだろうか。少しの変化はとて大きな危険信号であり、それを見逃さなければ、命を守ることができるのではないだろうかというのが私の考えである。家まで飲み込んでしまう土砂は、人間なんかは簡単に飲み込んでしまう。だからこそ、人間が土砂から家を守ろうとしても、無理なことだろう。そこで、私たちが一番に守るべきものは「家」ではなく「命」であり、それは、誰もが思うことだろう。少しの変化さえあれば、それを見逃さなければ、自分の命を優先して、適切な判断をし、避難してほしい。そして、一人でも多くの人の命が助かってほしい。それが私の願いである。